

パウロの喜び(1)

2008. 1. 22 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

テサロニケ人への手紙・第一 1章10節

また、神が死者の中からよみがえらせなされた御子、すなわち、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになったか、それらのことは他の人々が言い広めているのです。

世の中には賢い動物と愚かな動物が存在するらしいですが、もし動物でさえもそうであるなら、まして人間においてはどうかのでしょうか。イエス様も、賢い乙女たちと愚かな乙女たちについて話されました。

では、愚かな人間とはどういう人間なのでしょう。それは間違いなく、「心配する人間」です。「思い煩う」人間です。目に見えるものだけを見る人間は、「愚か」なのです。その結果得るものは一つもありません。

ダビデは非常に悩んだことがありました。嘘をついたこと、逃げてしまったこと、自分自身を守ろうと思ったこと、もありました。しかし主の光に照らされて、「私は愚かだ」とわかったのです。後になって、「主を仰ぎ見る者は、輝く」と言うようになったのです。

パウロも悩んだことのある男でした。いろいろなことで苦勞しました。なぜかと言いますと、せっかくイエス様の救いに与(あづか)るようになった大多数の人が、靈的に成長しなかったからです。「日々、私にのしかかる諸教会への心遣いがある」と、彼は言ったのです。

ご存じのように新約聖書の手紙は全部、すでに救われた人々のために書かれたのです。しかし、救われた人々がなかなか成長しなかったことについては、パウロは考えられないほど悩みました。ですから手紙の中で、「私はあなたがたのことを考えると、困っている、悩んでいる、苦しんでいる」ということばをよく使ったのです。

一方、成長している人々のことを考えたとき、テサロニケ第一の手紙の箇所に記されているように、

テサロニケ人への手紙・第一 1章2節

私たちは、いつもあなたがたすべてのために神に感謝し、祈りのときにあなたがたを覚え、

とパウロは言うことができたのでした。すなわち、このテサロニケという町にいる人々はパウロの喜びでした。彼らのことを考えたとき、嬉しくなったのです。ここで、「私は少なくとも毎月一回、あなたがた大部分の人々のために神に感謝する」と書いたなら、「なるほど」と誰でも思うでしょう。しかし「私はいつもあなたがたすべてのために感謝できると書かれています。彼らこそ、パウロの喜びの種でした。

なぜテサロニケにいる人々は、パウロの喜びになったのでしょうか。それは、彼らが主のご再臨を信じただけでなく、毎日待ち望んでいたからです。「私たちはイエス様の再臨を待ち望むために救われた」と彼らは思ったのです。

このテサロニケ第一の手紙は、パウロが最初に書いた手紙です。9節と10節を、もう一度読みます。

テサロニケ人への手紙・第一 1章9節、10節

私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、また、神が死者の中からよみがえらせなされた御子、すなわち、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになったか、それらのことは他の人々が言い広めているのです。

生けるまことの神に仕えるために神に立ち返り、イエス様が天から下って来られるのを待つことこそ、このテサロニケの人々の特徴だったのです。

そこで今朝は、三つのことについて考えたいと思います。

第一番目。この手紙についての一般的なことがら。

第二番目。この手紙が語ろうとしていることとは何か。

第三番目。このテサロニケにおける教会の誕生。

*第一番目。この手紙についての一般的なことがら。

このテサロニケと呼ばれている都市は、かつてサロニケと呼ばれ、昔からあった小さなものだったのですが、紀元前315年にアレクサンダー大王の後継者の一人すなわちマケドニアのカサンドロスが新たに拡充して造り替えたのが、テサロニケと呼ばれる都市になりました。それがパウロの時代には、十万人の住人を有する大都市に発展していたのです。テサロニケには、ユダヤ人も少なからず住み、会堂を持っているユダヤ人もいたのです。またそこは港町でもあり、大きな商取引の行なわれる大切な町でした。

この手紙はパウロによって記されたのであり、パウロと一緒にシルワノとテモテもいたことがわかります。シルワノは、アンテオケからパウロと一緒にになり、そして、テモテはルステラから一緒になったのです。手紙を受け取った受取人は、テサロニケに住んでいる

イエス様に出会った人々でした。

西暦52年、パウロは2度目の伝道旅行をしましたが、その時テサロニケにやって来ました。彼は、ピリピからアムピポリスとアポロニヤを通してやって来ました。そこに滞在していたときのパウロの生活は、人間的に見るなら失敗のように見えますが、ここから小さな集会在誕生した事実は、非常に大切な意味を持っています。確かに人間的に見るならば、パウロが捕らえられたことは失敗のように思われますが、実際はその反対で、パウロは大喜びで力強くテサロニケにおける伝道活動を続けました。

彼は、三つの安息日に大成功を収め、福音を宣べ伝えました。それを通してユダヤ人も、異邦人も、そして貴婦人たちも少なからずイエス様を信じるようになりました。それは、パウロの気力と体力とを最もよく証明した時でした。というのは、パウロが他人の世話になることを好まず、他人から批判されることも好まなかったため、自分で働いて生活をしなければならなかったからです。

パウロはこのようにして批判されないように心を配ったのですが、それにもかかわらず大きな反対が持ち上がったため、信者のことを考えて、離れたほうが良いと思ったのです。その後で、パウロはテサロニケから出た二人の同労者アリストアルコとセクンドを与えられました。彼らは救われ、導かれただけではなく、パウロの同労者になったのです。パウロはテサロニケにわずか4週間しか滞在しなかったのですが、豊かな祝福を経験することができたのです。

パウロはテサロニケを離れベレヤへ行き、そこで伝道活動を続けましたが、結果は同じように陰謀のためそこをも離れなければならなくなり、アテネへ向かったのです。そしてアテネでは非常に豊かな実を結ぶことができたのです。使徒行伝17章16節から18章1節まで読むとわかります。けれど、テサロニケの人々のことを配慮して、パウロはシルワノとテモテとをアテネから返したのです。

パウロは次にコリントへとやって来ました。このコリントで、パウロは再びシルワノとテモテに出会い、二人からテサロニケで見聞きしたことをくわしく聞いたのです。テサロニケの兄弟姉妹は、ユダヤ人から大きな攻撃を受けたにもかかわらず、本当に全部祈りの材料として主の御手から受け取り、模範的な兄弟姉妹でした。

彼らの受けた攻撃についての箇所を読んでみましょう。

テサロニケ人への手紙・第一 1章6節

あなたがたも、多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ、私たちと主とにならう者になりました。

テサロニケ人への手紙・第一 2章14節

兄弟たち。あなたがたはユダヤの、キリスト・イエスにある神の諸教会にならう者となったのです。彼らがユダヤ人に苦しめられたのと同じように、あなたがたも自分の国の人に苦しめられたのです。

テサロニケ人への手紙・第一 3章4節

あなたがたのところにいたとき、私たちは苦難に会うようになる、と前もって言っておいたのですが、それが、ご承知のとおり、はたして事実となったのです。

このテサロニケにいる兄弟姉妹は、確かに攻撃され多くの苦難を受けましたが、主の御手から受け取ることによって成長し、模範的な群れになったのです。「なぜ主はそのようなことを許したのか」と彼らは考えませんでした。そして、主の御手から受け取ったのです。1章2節、3節を読むと、次のように書かれています。

テサロニケ人への手紙・第一 1章2節、3節

私たちは、いつもあなたがたすべてのために神に感謝し、祈りのときにあなたがたを覚え、絶えず、私たちの父なる神の御前に、あなたがたの信仰の働き、愛の労苦、主イエス・キリストへの望みの忍耐を思い起こしています。

テサロニケ人への手紙・第一 1章8節、9節

主のことばが、あなたがたのところから出てマケドニヤとアカヤに響き渡っただけでなく、神に対するあなたがたの信仰はあらゆる所に伝わっているので、私たちは何も言わなくてよいほどです。私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、…

と記されています。

テサロニケ人への手紙・第一 2章19節、20節

私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのはだれでしょう。あなたがたではありませんか。あなたがたこそ私たちの誉れであり、また喜びなのです。

パウロは二人の同労者の報告を聞いた後、西暦53年にコリントで、このテサロニケ人への第一の手紙を書き、テサロニケにいる兄弟姉妹に送ったのです。この手紙はパウロが書いた最初の手紙でした。

パウロがこの手紙を書いた目的は、兄弟姉妹のために一番大切な目標を指し示すことでした。新約聖書の中にある手紙はすべて、救われた兄弟姉妹のために書かれたものであり、彼らの信仰がますます成長し、いっそうイエス様に拠り頼むようにと記されています。

今まで、私たちはこの手紙の一般的なことがらについて考えてきましたが、今度は第二番目の点について、考えたいと思います。

*第二番目。この手紙の語ろうとしていることとはいったい何か。

主な内容は、「イエス様がご自分を待つ者のために必ず来られる」ということです。

テサロニケ人への手紙・第一 1章10節

また、神が死者の中からよみがえらせなされた御子、すなわち、やがて来る御怒りから私たちが救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになったか、それらのことは他の人々が言い広めているのです。

テサロニケの人々は、救われただけではなく、主イエス様が天から来られるのを待ち望むようになりました。

テサロニケ人への手紙・第一 3章13節

また、あなたがたの心を強め、私たちの主イエス様がご自分のすべての聖徒とともに再び来られるとき、私たちの父なる神の御前で、聖く、責められるところのない者としてくださいますように。

まず、イエス様のご再臨は真理であるだけではなく、イエス様を信じる者の信仰生活において、生きて働く力そのものが現われる秘訣にもなっているのです。どの章を読んでも、その終わりには必ず、「イエス様は再臨される」というみことばで結ばれているのです。今読みました1章10節に書いてあります。「イエス様がまた来られる」と。2章19節にも同じことが書かれています。

テサロニケ人への手紙・第一 2章19節

私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのはだれでしょう。あなたがたではありませんか。

テサロニケ人への手紙・第一 3章13節

また、あなたがたの心を強め、私たちの主イエス様がご自分のすべての聖徒とともに再び来られるとき、私たちの父なる神の御前で、聖く、責められるところのない者としてくださいますように。

一番よく知られている箇所として、

テサロニケ人への手紙・第一 4章16節、17節

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らと一っしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

また、最後の5章の中にも書かれています。

テサロニケ人への手紙・第一 5章23節

平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだは完全に守られますように。

イエス様のご再臨はどのような影響を与えるのでしょうか。各章ごとに、一つのテーマを取り上げて考えてみましょう。

・1章では、イエス様のご再臨が、どのような影響を与えるかを考えてみると、このことに対してパウロは、「新しく生まれ変わった兄弟姉妹には、イエス様のご再臨こそ生き生きとした望みを与える」と答えています。人間にとって最も大切なことは、「生きる望み」ではないでしょうか。

・2章では、イエス様のご再臨が、救われた兄弟姉妹の奉仕に対して、どのような影響を与えるかということで、この問いに対しては、「忠実な主のしもべに対して、主のご再臨は力づけ、勇気づける望みを与える」と答えています。

・3章では、イエス様のご再臨が、私たちの心の状態に対して、どのような影響を与えるかという問いが考えられます。それに対して、「主イエス様のご再臨は、信者を聖める望みが与えられる」と答えています。

・第4章の後半では、イエス様のご再臨が、信じる者の死に対して、どのような影響を与えるかと問われています。これに対して、「イエス様のご再臨は、残された者に対して慰めを与える望みを約束している」と答えています。

・そして最後の第5章では、イエス様のご再臨が、信者が目をさましている状態に対して、どのような影響を与えるかを考えてみると、「イエス様のご再臨は、まどろんでいる信者を呼び覚まし、完全な献身へと導いてくださる」ということなのです。

ですから、このことからわかるように、手紙全体の中心点は、まさに「主イエス様のご再臨」と言えるのです。そして、イエス様のご再臨こそ私たちの全生活を根本的に造り替えるのです。イエス様のご再臨がなければ、どのような力づけ、勇気づけも存在しないこととなります。ただイエス様のご再臨を待ち望む者だけが、ますます聖められ、ますます高められるのです。イエス様のご再臨がなければ、先に死んだ信者と再会する望みもなく、残された者への慰めもないこととなります。もしも、イエス様のご再臨なさらなければ、献身の生活も全く価値のないものになります。

しかし、「イエス様は必ず再臨なさる」のです。これこそパウロが力強く語ろうとしたことに他なりません。主にある兄弟姉妹が正しい道を歩もうとする限り、絶えずイエス様のご再臨に心の目を向けていなければなりません。

私たちの人生を決定しているものはいったい何でしょうか。目の前にあるいろいろな出来事でしょうか。それとも、イエス様のご再臨を待ち望む生活でしょうか。

今まで私たちは二つの点について考えてきました。手紙についての一般的なことがら、そして第二番目、手紙の語ろうとしていることについてでした。

*第三番目。テサロニケにおける教会の誕生について、聖書は何と言っているか。

パウロがテサロニケに送った手紙は、非常に丁寧でわかりやすく書かれているため、誰が読んでもだいたいわかるのではないのでしょうか。そしてローマ人への手紙のように教理の手紙でもありません。またガラテヤ人への手紙のようにいろいろな対立の問題を含んだ手紙でもありません。

この手紙はまさに、パウロがテサロニケにいる信者一人一人に対して、真心を込めて書いた手紙だと考えられます。ですから、私たちはテサロニケの信じる者の群れをよりよく知りたいものです。

テサロニケの教会の誕生について、この手紙の中には何も書いてありません。しかし、使徒行伝を読むと、いろいろなことが書き記されています。ちょっと読んでみましょう。

使徒の働き 17章1節から7節

彼らはアムピポリスとアポロニヤを通過して、テサロニケへ行った。そこには、ユダヤ人の会堂があった。パウロはいつもしているように、会堂には行って行って、三つの安息日にわたり、聖書に基づいて彼らと論じた。そして、キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならないことを説明し、また論証して、「私があなたがたに伝えているこのイエスこそ、キリストなのです。」と言った。彼らのうちの幾人かはよくわかって、パウロとシラスに従った。またほかに、神を敬うギリシヤ人が大ぜいおり、貴婦人たちも少なくなかった。ところが、ねたみにかられたユダヤ人は、町のならず者をかり集め、暴動を起こして町を騒がせ、またヤソンの家を襲い、ふたりを人々の前に引き出そうとして捜した。しかし、見つからないので、ヤソンと兄弟たちの幾人かを、町の役人たちのところへひっぱり行って、大声でこう言った。「世界中を騒がせて来た者たちが、ここにもはいり込んでいます。それをヤソンが家に迎え入れたのです。彼らはみな、イエスという別の王がいると言って、カイザルの詔勅にそむく行ないをしているのです。」

「聖書に基づいて」と書かれています。パウロにとって大切なのは、自分の思っていることと考えていることではなく、聖書の記述です。神のみことばです。また、「このイエスこそ、キリストなのです」とあります。キリストとは、旧約聖書で予言された「救い主」のことです。「彼らのうちの幾人かはよくわかって」と書かれています。光に照らされたので確信を得たということです。

彼らは何と言ったかといいますと、「イエス様を第一にすべきです。イエス様は王の王、主の主であられるからです」と。

使徒の働き 17章8節から11節

こうして、それを聞いた群衆と町の役人たちとを不安に陥れた。彼らは、ヤソンとそのほかの者たちから保証金を取ったうえで釈放した。兄弟たちは、すぐさま、夜のうちにパウロとシラスをベレヤへ送り出した。ふたりはそこに着くと、ユダヤ人の会堂には行って行った。このユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで、非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。

聖書の中に、「良い人はいない。ひとりもない」と書かれているのに、ここに「良い人たち」と書いてあります。どうして彼らは良い人たちであったかといいますと、それは「本当だったら有難いけれど…。自分で調べましょう」と。パウロはその様子を見たとき、嬉しくなったのです。みことばを聞き、そして自分で「毎日聖書を調べた」と記されているからです。

ご存じのように、ヨーロッパで最初に生まれた信者の群れはピリピの集会でした。パウロとシラスはピリピで捕らえられ、ひどい取り扱いを受けました。犯罪人のように刑務所に入れられるようになったのです。けれど、彼らは決して周囲の人間を見ることなく、絶えず復活されたイエス様を見上げました。ですから獄中においてもいつも喜び、感謝することができました。彼らは捕われの身から解放された後、テサロニケへ行き、そこでも同じように、喜びと感謝をもってイエス様を宣べ伝えました。

三つのことを考えましょう。

第一番目。パウロはテサロニケでどのような働きをしたか。

二番目。宣べ伝えられたメッセージは、テサロニケでどのような影響を与えたか。

三番目。テサロニケにおける迫害の原因は何であったのか。

*第一番目。パウロはテサロニケでどのような働きをしたか。

前に読みました使徒行伝17章によると、パウロの一行がテサロニケにあるユダヤ人の会堂へ行ったことがわかります。1節です。パウロはそこで旧約聖書に基づいて、彼らユダヤ人と論じ合いました。旧約聖書はパウロにとって最高の権威でした。パウロはイエス様によって捕らえられた者として、人間が聖書についてどう思うかではなく、「聖書が人間について何と語っているか」ということが非常に大切であることを強調したのです。聖書は人間に対して絶対の権威を持っている、ということ信じない者は、聖書について語る権利をもっていません。

パウロは、福音の中心となる一番大切な「イエス様は苦難を受け、死人の中からよみが

えられた」という事実を実証しました。そのときパウロは、自分が復活なされたイエスを拝し、更にみ声を聞いたことを確実に話して聞かせたに違いありません。そして主イエス様の復活は、主イエス様はメシヤすなわち約束されている救い主であられ、罪の問題を解決されるお方であるということを証明し、論証したのです。社会問題や政治の問題に立ち入ることをはせず、ただ「十字架に付けられ、復活されたイエス様」だけを語ったのです。また、イエス様こそ、聖書で約束され、イスラエルの民が長い間待っていた「メシヤ」であり、「すべての主」であることももちろん宣べ伝えたのです。

ですから福音の中心は、決して聖書の倫理、道徳の教理ではなく、「イエス様が為されたみわざ」と、それが「こんにちまでもたらされている意義」に他ならないのです。

*第二番目。パウロは、テサロニケでどのような影響を与えることが出来たか。パウロの宣べ伝えた福音はどのような影響を与えたか。

それは使徒行伝17章4節を読むと、その群衆の中には信心深いギリシヤ人が多数おり、信者になった貴婦人たちも少なくなかったということがわかります。また、ユダヤ人のみならず異邦人もイエス様を信じたのです。5節を読むと、そのために迫害、暴動が起こったこともわかります。

ですから福音は、二重の効果をもって影響したということが出来ます。つまり、一方においてはイエス様を信じ受け入れた者がおり、他方においてそれを拒み、迫害や暴動を起こす結果を招いたということです。すなわち、一方においては主のみことばを聞いてそれを信じ、まったく新しい者に造り替えられるのです。このとき、主なる神に対して盲目であった罪人がみことばを信じ、イエス様を受け入れることによって、主に従う新たな決意を持つようにと導かれたのです。

私たちも、このように大いなる神の力に、徹頭徹尾抛り頼み、信頼しようではありませんか。そのような人は、大いなる主の奇蹟を体験することができるのです。

テサロニケにおいては、このようにしてイエス様を信じたユダヤ人たちもギリシヤ人たちも、イエス様にあって一つの者となりました。けれど、ユダヤ人が異邦人と一緒になるなどということは、以前にはとても考えられないことでした。イエス様によって、「統一」と、「一つのからだなる教会」とが生まれました。

パウロは後に、ローマ人への手紙の中に、次のように書いたのです。

ローマ人への手紙 1章16節

私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。

つまり、福音は「教え」ではなく、救いに至るための「救いを得させる神の力」なのです。この力を、ユダヤ人もギリシヤ人も、すべて信じる者は共通に体験することができたのです。かつては憎み合い、軽蔑し合っていたユダヤ人と異邦人が、イエス様を信じた今

はお互いに一つとなり、交わりを持つことができるようになったのです。

しかし、福音はすべての人に対する神の力ではありません。イエス様を信じる者にとってのみ、神の力となります。福音はユダヤ人の死んだ信仰を取り除き、福音は異邦人を虚しい試みから解放したのです。イエス様のみが、イエス様を信じるユダヤ人と異邦人の目標と中心になったのです。組織と結びつくのではなく、聖霊によって一つになることが実現しました。「イエス様のいのち」が、彼らの中に生き生きと脈打っていました。ですから、「一つの生き生きとしたからだなる教会」になることができたのです。

しかし、イエス様が中心となる群れではどこでも、必ず悪魔の攻撃が試みられるのです。悪魔の働きと攻撃とを受ける群れでなければ、私たちの信仰は主の前に役に立たないものであるとも言えるのではないのでしょうか。

*最後に、三番目。テサロニケにおける迫害の原因はいったい何だったのか。

使徒の働き 17章6節

しかし、見つからないので、ヤソンと兄弟たちの幾人かを、町の役人たちのところへひっぱって行き、大声でこう言った。「世界中を騒がせて来た者たちが、ここにもはいり込んでいます。」

これこそパウロに反対する告訴の第一の点でした。

福音を宣べ伝えられているところでは、人の心が動かされるものです。罪の赦しを体験した者は、正しい望みを持つことができるようになります。イエス様のよみがえりのいのちをいただいている者は、今までの人生の虚しさを感じていた状態から解放されて、はっきりとした一つの目的を持つことができるようにされたのです。福音によって一つの革命が引き起こされたのです。そしてこの革命こそ、「永遠の滅び」から救われるためにどうしても必要なことなのです。

告訴の第二の点は、パウロの宣べ伝えた事実です。

使徒の働き 17章7節

「それをヤソンが家に迎え入れたのです。彼らはみな、イエスという別の王がいると言って、カイザルの詔勅にそむく行ないをしているのです。」

しかし、この点こそ福音の中心ではないのでしょうか。すなわち、本当の王はローマ皇帝ではなく、「復活なさったイエス様」であるという、これこそ福音の中心になるものです。イエス様は、「天においても、地においても、すべてがわたしに与えられている」とおっしゃることができたのです。イエス様は、こんにちも全宇宙を支配しておられるお方です。

テサロニケの町では、イエス様を信じる者も、また信じていない者も、敵でさえも、すべての人々が、「主イエス様こそ王であられる」ことを知るようになりました。そしてこの

証しの事実こそ、テサロニケにおける小さな集会の存在がかかっていたのです。

異邦の地において、主なる神と敵対している者が大勢いるただ中で、イエス様を愛し、忠実に従う兄弟姉妹がいたのです。そこから、「いのち」と「光」が生まれたのです。

こんにちの私たちの周囲の状況は、テサロニケにおいて見られたと同じような状態の中にあると言えるのではないのでしょうか。しかし、主のみことばこそ、人の心を新しく造り替え、悪魔の奴隷から解放し、「神の子ども」にしてくださる力を持っているのです。主のみことばは、現実として「神の力」であり、奇蹟を行なう力です。

私たちは、この主のみことばに対して自分の心を開くのでしょうか。それとも、閉じるのでしょうか。私たちが心の平安とまことの喜びを持つことができるか、それとも、望みなく永遠の滅びに沈んでいくかということは、私たち自身の心の態度にかかっています。

ただイエス様だけが王であられ、イエス様以外に「王」はいない、と確信をもって、また喜びをもって証しすることができる人々は、本当に幸せではないのでしょうか。

了